

先輩弁護士に倣う

会員 小玉 大地

執筆時点で入所3か月しか経ていないものの、このわずかな期間で経験したことを振り返ろうと思う。私が所属する法律事務所は、多種多様な案件を扱っているためクライアントも大企業から個人まで様々である。若輩にもかかわらず、多くの案件に関わらせていただけたが、その中で特に心に残っている場面がある。クライアントが大企業であれば窓口となっている担当者の方も法律相談に慣れているため理路整然と内容を説明して下さることが通常であるが、一方で、個人で初めて法律相談をなさる方は（慣れていないため当然ではあるが）何を話していいかわからず、一見無関係なことまで話してしまうことが多いように思われる。

私が個人の方からの法律相談の窓口になったとき、相談者が相談内容に関係のない話を私の幾度の介入を気に留めることなく長時間話し続け（私の聴取する能力が不足していることも一因ではあるが）、精神的に疲労してしまったことがあった。そんなとき、先輩弁護士に、そのことを相談すると「弁護士は聞くことが仕事」、「相談者は話を聞いてもらえないことが一番ストレスになる」ため、関係ないような話でも真剣に聴取しなければならないと一蹴されてしまった。

私は、先輩弁護士から労りの言葉をかけてもらえんと思っていただけ、その言葉には正直驚いた。しかし、それと同時に、未だ修習生気分が抜けていないことに気づかされた。今までの指導される

受動的な立場とは異なり、法律の専門家として問題解決に必要な事実関係等を能動的に整理し、依頼人に道しるべを示していかねばならないという弁護士として（社会人として）当然求められることができていなかったことを深く反省する機会となった。

また、こんなこともあった。入所直後、私が初めて法律相談を担当したときのことである。時間をかけて相談内容を調査したものの、自分の回答が企業の業務に影響を与えることに足がすくみ、相談者に連絡をいれることに躊躇していた。そんなとき、そのことを先輩弁護士に相談すると、「自分は弁護士バッジをかけて回答している」、そういう気持ちで回答することが大事と私に言った（さすがに命はかけないらしいが）。

間違えても辞めて責任をとればそれでいいということではなく「間違えていたら辞めてもいいと思えるくらい調べろ、考えろ」という様に私は受け取った。この助言のおかげで、再度、相談内容を調査し、その後、自信をもって回答することができた。

ここに書いたこと以外にも事務所の先輩からは、多くのことをご教授いただいております、成長を感じると同時に、自分の至らない点に歯がゆさを感じている日々である。

このエッセイが掲載されるときには、今よりも自分が弁護士として成長していることを願うばかりである。